

『柳宗元古文注釈』の訳注について

- ・主に訳注につき、不適當と思われる箇所について卑見を提案し、あるいは要望を述べる。
 - ・私の提案を赤字で記し、その理由を※で述べる。
 - ・あくまで一つの見方である。誤りがあるかもしれないことをお断りしておく。
-

「鵲説」

P75、5 行

[現代語訳]

「はやぶさはもともと官職、爵位、俸禄への欲や、郷里、親戚、友人への**執着**愛が無いのである」

※「愛が無い」では、この後に「今我慢して小鳥を放ったのは、報いようという思いがあるからなのだ」とあるのに、うまく接続しない。「執着」「思い入れ」あたりがよいのでは？

P75、8 行

「いま我慢して小鳥を放ったのは、**(爪やてのひらを暖めてもらった恩に)** 報いようという思いがあるからなのだ」

※[注解]に「報」を加えるべき。

例えば：報 前段に「必ず鳥の握に盈つる者を取り、……以て其の爪掌を燠め、左右して之れを易う」とある。「自分の爪やてのひらをあたためて」もらったことへの恩に報いる。

P76、－3 行

「これらは**へつらい笑う**言葉がおだやかな者に近くはないのか」

※「言葉がおだやかな者」では、いかにも善良そうである。[注解 6]煦煦に「へつらい笑う」としている。これをそのまま訳に用いるのがまぎれがない。

「乗桴説」

P113、－7 行

[注解]

「13 捷 挙げる。ここでは説を掲げること」

※ここは解釈が説が色々ある所で、もっと詳しい注が必要。『柳文指要』p522 には「同幅、同長」とし、蔣之翘は、「トジル、スミヤカナラク」の訓を与えている。

「説車贈楊晦之」

P118、5 行

[注解]

「2 柳子 柳宗元の自称。……」。

※「柳子」は何度も出てくる。ここの説明が詳しいが、初出 p64 の「柳子」にまとめるべき。

P126、-1 行

[注解]

「30 仁義 仁愛と正義。……」。

※p67 に「仁義」の注解があり、全く同じ。整理が必要。

「復呉子松説」

P147、8 行

「このような人事によって昇進・降格しない者を経ない者は一人か二人あれば良い方であろう」

※原文の訓読は「此れより出でざる者あらん」。「このような人事を経ない」ではやや抽象的。ただちにわかるように、前文に基づき補っておくのがよいのでは。

P149、7 行

[要旨]

「羆は、鹿、獾、虎のどれよりも中で最も力が強く、また人にも害を与える動物である」。

※もとのままでは、羆が、鹿・獾・虎の類のようである。

「梓人伝」

P204、5 行

[書き下し]

「豈に其の罪ならんや、亦た之に^{まか}任すに任ずるに在るのみ」

※訳もこれに関連して正すべき。下記を見よ。

P204、－4 行

[現代語訳]

「肝心なのは、やはり棟梁に任せるということにあるのだ」

→棟梁は、家を作る者の言うことをただ聴いただけなのだ。

※宗元は、棟梁たる者、自分の職務を全うすべきで、建築主に屈するべきではないと言っている。

「李赤伝」

P211、－8 行

[現代語訳]

「彼の周りを取り囲んで朝まで見守った」

※「周り」は不要。

P213、8,9 行

[現代語訳]

「杯がまわり友人は李赤のことを言わないうちに酒を飲んでしまい、ふと李赤に目をやると、もういなくなっていた。

→「杯がまわり、友人は李赤をかまわずに飲み、酔って李赤を見ると、もういなかった」。

※[書き下し]は、「酒行はれ、友未だ言ふに及ばず、已に飲みて赤を顧みれば、則ち已に去れり」。

「乞巧文」

P236、6 行

[現代語訳]

「私には大拙がございます。知恵によっても教化できず、医術によっても治療できず、威力によっても変えられず、また寛大さでも許容できません」

→「私はひどく生き方の下手くそな人間です。知恵ある人も私を教化できず、医術によっても治療できず、外からの力によっても変えられず、寛大な人さえも許容できません」

※「大拙」は key word。このままにするのも一つの立場。しかし、日本語ではないので、分かりやすい訳を試みた。[書き下し]は、「臣に大拙有り、智も化せざる所……」。
※「寛大さでも許容できません」が、わかりにくい。それを分かりやすくするために、全体に手を入れてみた。

P236、－4 行

[現代語訳]

「(天帝の孫娘さま) どうして私の心を縛り付けて、いつまでも移り変わらせないようになさるのですか」

→※[書き下し]は「胡ぞ臣が心を執り、常に移らざらしむるや」。自分を「大拙」のままに留めている天帝の孫娘に訴えている。「大巧」たちと交互に比較しつつ文が展開していくので、「臣が心を執り」の主語を明示するのがいい。

P237、1, 2 行

「私がもしこのことを真似したならば、私に怒りの矛先が集中しますが集まってくるはず」

※なるだけ、日本語らしくするのがいいと思う。

P242、－3 行～p243、1 行

[現代語訳]

「たとえ大金を並べられても、破れた箒のような私の文章を売りませんたくはないというくらいの自負を持っているのです。それなのにひざまずいて貴人に(私の文章を)ささげたとしても、棄てられてしまい受け入れられることはないのです。貴人は私は眉をひそめて額にしわを寄せ、口先に唾を溜め胸くそが悪くなって吐いてしまいます」

がたまり吐き気を催します。**私は**大いに恥じて帰り、恨みでいっぱいになって頭をたれる**しかないのです**ことでしょう」。

※[書き下し]は「万金を旁羅すれども、弊帚を鬻がず。驚きて豪傑に呈すれば、投棄して有せず。跪きて豪傑に呈すれば、投棄して有せず。眉瞋め頬蹙め、喙垂し胸欧く。大いに赧じて帰り、恨みを填たして首を低る」。「眉をひそめ」るのは、貴人だろう。

「有蝮蛇文」

P275、－7 行

[現代語訳]

「そうでなければ、**獲物の人間**が見つからないことを不満に思っ

※蝮蛇は、獲物の人が見つからないと、腹を立てて草木にかみつくという文脈。「獲物の」を加えるのが、ただちに分かるのでいい。

「逐畢方文」

P300、10 行

[現代語訳]

「政令が正しく行われていれば、国の恐れは止むはずだ」。

→「政令が正しく行われていれば、**国が恐怖に見舞われることは収まるはずだ**」。

※[書き下し]は「令行われて訛たざれば、国の恐れ盍ぞ已まざる」。訳はあまりに直訳調だと思う。

「弁伏神文」

P307、－5 行

[現代語訳]

「その薬売りはあなたを欺いて、しなびた芋を売り**つけ**さばく**ことができたのです**」。

※[書き下し]は「彼の薬を鬻ぐ者、子を欺きて售るを獲たり」。あくどい行いであることをはっきりさせる訳が良いと思う。

P311、1 行

[現代語訳]

「これからはよくよく慎重に見極める調べるように」。

※[書き下し]は「後は慎みて之を觀よ」。薬なのか毒なのかを「觀よ」の意だから「見極める」あたりの訳が良いのでは。

「哀溺文」

P328、2行

[現代語訳]

「世の中にはきっと大氓とよばれるともいうべき富貴の愚か者愚昧なる権力者が、大金のために命を落とすようなことがあると思われる」

※[書き下し]は「大貨の大氓を溺れしむる者有らざるを得んや」。「大氓」は「永の氓」、永州の民に対応する語。[注解]に「5 大氓。……「大氓」という用例は、柳宗元以前には見られない。位が高くても、認識が民のように足りない者という意味を含めて、「愚昧なる権力者」と訳す」という。これがまちがっているわけではないが、「権力者」に限定せず、官僚層の大物あたりを想定すればよいのでは。呉文治『柳宗元詩文選評』（三秦出版社、2004）は、「大氓者、当朝有錢有勢的大人物也」という。

P331、2行目

[現代語訳]

「大氓は、官禄に執着せず、財貨を辞退しないずるどころか、多方にわたってチャンスを探い、不正な手段を使ってでも利益を追求したがつている」

※[書き下し]は「禄を譲りて以て富を辞せずして、又旁く窺ひて詭り求む」。誤訳と思われるのは一箇所。私なりに全体を訳してみると以下ようになる。

→「(富貴の愚か者は) 官禄を手放し財貨を辞退するようなことはさらさらせず、正道からそれて機会を探い、人を騙して利益を追求している」。

P333、－6行

[書き下し]

「民既に質質として知無く、故に彼がためにと咸諡して氓と為さん」。

※原文は「民既質質而無知兮、故與彼咸為氓」。「質質」は、[注解]24に言うように「目明らかならざるの貌」で、無知であるさま。「がために」は蔣之翹本の訓。それで良い

のでは。

P334、4, 5 行

[現代語訳]

「庶民とはもともと無知な者たちである。だから愚かな溺れた民と同じよう庶民にも「氓」と贈り名しようではないか」。

→

「庶民とは無知な者である。だから庶民を氓と呼ぶのと同じく富貴の愚か者にも「氓」と贈り名しようではないか」。

※[書き下し]は上掲。「威」というから、これは、庶民も「大氓」も含む。

P334、6 行

[現代語訳]

「今をときめく人よ、私のために自らの非を改めてくれるように願ってやまない」

→「中程度の人（変わる可能性のある人）たちよ、自分のために自らの非を改めるように願ってやまない」。

※[書き下し]は、「冀はくは中人の余が為に再び更めんことを」。「中人」につき[注解 26]は「権勢のある朝臣」とする。「大氓」を「愚昧なる権力者」と訳したのに関連してのものだろう。ただし、「中人」の最も普通の例は、「上知・中人・下愚」の、「中人」。『論語』雍也に「中人以上には、以て上を語る可きなり。中人以下には、以て上を語る可からざるなり」とあり、同陽貨に「唯だ上知と下愚とは移らず」とある。「余が為に」は、本人のためにの意だろう。中人は「移」る、変化する、宗元のこの句の「更」が可能な人間を指すのでは。すなわち、大氓にも中人はいるという認識であり、変化の可能性のある富貴の大物に呼びかけているのではないだろうか。

「余が為に」の「余」は、宗元のことではなく、中人自身を指す。「爾雅」釈詁に「朕、余、躬、身也」とある。本書では、p368、－2 行に「身を殺すは予の威いに匪ず」とあり、これに「自分（蓑弘）は命を落としたことを悲しみはしない」（p369、3 行）の訳を与えている。「予」は宗元ではなく蓑弘自身である。

「弔屈原文」

P384、9, 10 行

[現代語訳]

「芈姓の中で、屈氏を名乗った者は一体何人いるだろうか。(屈氏を名乗る者は沢山いるのに) どうして先生一人だけが熱い思いを持ったのであろうか」

→「**芈姓から屈姓に至るまで、楚の国で同族の貴族はどれほど多くいることだろう、**
どうして先生一人だけが**腸を焼くほどのこんなにも**熱い思いを持ったのであろうか」

※[書き下し]は、「芈の屈と為るものは幾何ぞ、胡ぞ独り其の中腸を焚くや」。[注解28]に「祝融の子孫の八姓の一。楚の始祖の姓が芈である」という。訳はまちがいのうわけではないが、より分かりやすくすれば、一例としてこのようになるのでは。

P385、－3 行

[現代語訳]

「私は今の宮仕えの者を悲しく思う。……君主から禄を頂いても、これが多くないことを恐れ、位を得ても高くないことを悲しむ。そういう状態に私は退いてみずから服従し、口をつぐんでいる。自分の提言が行われないからである」

→「私は今の宮仕えの者を悲しく思う。……君主から禄を頂いても、これが多くないことを恐れ、位を得ても高くないことを悲しむ。**私はそういう官界からは身を退いて、自分を持し、ただ黙っているしかない。**自分の提言が行われないからである」。

※[書き下し]は「吾今の仕たる者を哀しむ。……君の禄を食むも厚からざるを畏れ、位を得るも昌んならざることを悼む。退きて自から服して以て黙然として、吾が言の行はれざるを曰ふ」。「自から服す」は、「自らを守る」「自らを持す」ことだと解する。

「弔楽毅文」

P390、6 行

[現代語訳]

「車の車軸」。

※「車軸」の「車」は不要。

P390、7, 8 行

[現代語訳]

「昭王の命はこの世に引き止めることができない」。

→「昭王の^{いのち}命はこの世に引き止めることができない」。

※「命」、「命令」か「生命」か、一瞬迷うので、ルビを振るのが良いと思う。

P391、1 行

[注解 5] 「大厦之騫兮 「大厦」は、大きな家。……**大きな家・車の軸、いずれも昭王を喩える。**」

※赤字部分を補うと分かりやすい。